

博士論文（要約）

論文題目 明清白話小説の「語り」
——『三国志演義』『水滸伝』を例に

氏 名 佐高 春音

目次

序章	1
1. 物語論の概要	1
2. 日中の物語論的アプローチ	4
3. 研究対象と問題提起	9
第一章 『水滸伝』における作中人物の性格描写	13
はじめに	13
1. 『水滸伝』の人物描写	14
2. 叙述に偏りの見られる回	18
3. 『水滸伝』と「酒色財気」	25
小結	27
第二章 『水滸伝』の人物呼称に見える待遇表現	29
はじめに	29
1. 地の文における呼称の種類と用法	30
2. 「待遇」をあらわす呼称とその分布	32
3. 「待遇」する主体	37
4. マイナス呼称の機能と効果	40
5. 「肩入れした語り」から視点の反映へ——金聖歎本の改変	41
小結	43
第三章 金聖歎本『水滸伝』の批評に見える「眼中」について	47
はじめに	47
1. 作中人物の眼中に関わる金聖歎評の概要	48
2. 百二十回本李卓吾評の影響	51
3. 作中人物の眼中に関わる金聖歎の解釈	53
4. 作中人物の眼中に関わる金聖歎の書き換え	58
小結	64
第四章 毛宗崗本『三国志演義』の「視点」をめぐる改変	67
はじめに	67
1. 「視点」という概念について	68
2. 嘉靖本に見える「視点」の問題点	69
3. 「見る」ことの示唆と作中人物の導入	71
4. 毛宗崗本の「視点」に関わる改変	74
5. 毛宗崗評から見る「視点」への意識	79
小結	80

第五章 『三国志演義』 作中人物導入考——『平話』 から毛宗崗本まで	83
はじめに	83
1. 『演義』 における作中人物導入	84
2. 不定の存在としての導入について	89
3. 人物紹介の重複	95
小結	100
終章	103
1. 本論の概括	103
2. 結論	105
3. 白話小説の「語り手」のモデル図	108
参考文献	111
初出一覧	119

本文

博士論文本文は 5 年以内に出版予定。

参考文献（本論で言及したものに限る）

日本語文献

- ・荒木達雄「“嘉靖本”「水滸伝」と初期の「水滸伝」文繁本系統」（『日本中国学会報』第 64 集、2012 年）
- 「百回本『水滸伝』の編纂方針」（東京大学博士論文、2018 年）
- ・荒木典子「水滸伝の待遇表現」（『開篇』第 21 号、2002 年）
- ・出原健一「自由間接話法の認知プロセス——マンガ学を手掛かりに（前）」（『滋賀大学経済学部研究年報』第 23 号、2016 年）
- ・井口千雪「『三国志演義』の執筆プロセスに関わる考察」（『日本中国学会報』第 64 集、2012 年）
- 「『三国志演義』三系統の版本の継承関係——異同の全体像から見た成立過程の考察」（『京都府立大学学術報告・人文』第 66 号、2014 年）
- 『三国志演義成立史の研究』（汲古書院、2016 年）
- ・今井敬子「中国語の語りにおける知覚動詞の用法について」（『人文論集』第 57 号-1、2006 年）
- ・ウェイン・C・ブース『フィクションの修辞学』（米本弘一、渡辺克昭、服部典之訳、水声社、1991 年）
- ・上田望「毛綸、毛宗崗批評『四大奇書三国志演義』と清代の出版文化」（『東放学』第 101 輯、2001 年）
- 「『三国演義』の言葉と文体——中国古典小説への計量的アプローチ」（『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第 25 号、2005 年）
- ・上原究一、荒木達雄「石渠閣補刻本『忠義水滸伝』の補刻の様相について」（『中国文学報』第 91 冊、2018 年）
- ・氏岡真士「“英雄譜”諸本について」（『名古屋大学中国語学文学論集』第 24 輯、2012 年）
- ・内田慶一「中国語における「不定名詞主語文」（福井大学教育学部紀要 第 1 部 人文科学 第 37 号、1989 年）
- ・榎本正純『源氏物語の草子地——諸注と研究』（笠間書院、1982 年）
- ・閻萍「『南総里見八犬伝』における『三国志』『三国志演義』の影響」（『中国古典小説研究』第 4 号、1998 年）
- ・大内田三郎「『水滸伝』版本考——「漢宋奇書」と「英雄譜」の関係について」（『天理図書館報ビブリア』第 65 号、1977 年）
- 「『水滸伝』版本考——『二刻英雄譜』について」（『天理大学学報』第 129 輯、1981 年）

- ・大木康『不平の中国文学史』（筑摩書房、1996年）
- 『明末江南の出版文化』（研文出版、2005年）
- 『原文で楽しむ明清文人の小品世界』（集広舎、2006年）
- 『中国明末のメディア革命——庶民が本を読む』（刀水書房、2009年）
- 『馮夢龍と明末俗文学』（汲古書院、2018年）
- ・大楠栄三「作中人物導入の手法：『二重の未知』——十九世紀スペイン小説において」（『静岡県立大学国際関係学部研究紀要』第14号、2001年）
- ・大西克也「所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張」（『漢語与漢語教学研究』第2号、2011年）
- ・岡崎由美「明代長編伝奇小説の文体」（『中国文学研究』第17期、1991年）
- 「看官・説話的・開場戯——書かれた物語のプレゼンテーションをめぐって」（『中国文学研究』第18期、1992年）
- ・小川環樹『中国小説史の研究』（岩波書店、1968年）
- ・笠井直美「『水滸』における「対立」の構図」（『東洋文化研究所紀要』第122号、1993年）
- ・片桐洋一『源氏物語以前』（笠間書院、2001年）
- ・川浩二「闘と闘の語り——『水滸伝』・『金瓶梅』における駢語の敘述機能」（『中国文学研究』第28期、2002年）
- 「「凶相」の「好漢」——《水滸伝》における人物の容貌描写について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第47輯 第2分冊、2001年）
- ・川合康三『中国の自伝文学』（創文社、1996年）
- ・川島優子「『金瓶梅』罵語考——呉月娘の罵語について」（『中国古典小説研究』第8号、2003年）
- ・神郡悦子「焦点化についての考察」（『文芸言語研究』文芸篇、第18巻、1990年）
- ・北村真由美「《水滸伝》における作者介入文について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第44輯 第2分冊、1998年）
- 「『水滸伝』における語りの構造——「百回本」と「百二十回本」の比較を通して」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第47輯 第2分冊、2001年）
- 「金聖歎本『水滸伝』の文体——評語と本文の融合をめぐって」（『中国文学研究』第28期、2002年）
- ・木村秀樹「「存在文」があらわす〈存在〉の意味及び‘定不定’の問題」（『漢語与漢語教学研究』第2号、2011年）
- ・金文京『三国志演義の世界【増補版】』（東方書店、2010年）
- ・金水敏「人を主語とする存在表現——天草版平家物語を中心に」（『国語と国

文学』第 59 卷 第 12 号、1982 年)

・邢文柱『『三国演義』に見る待遇表現——侮蔑表現を中心に』(『比較文化研究』第 68 号、2005 年)

・輿水優「“个”について」(『中国語学』第 144 号、1964 年)

・小松謙『中国歴史小説研究』(汲古書院、2001 年)

——『「現実」の浮上——「せりふ」と「描写」の中国文学史』(汲古書院、2007 年)

——『『三国志演義』の成立と展開について——嘉靖本と葉逢春本を手がかりに』(『中国文学報』第 74 冊、2007 年)

——『「四大奇書」の研究』(汲古書院、2010 年)

——『『水滸伝』諸本考』(『和漢語文研究』第 14 号、2016 年)

——「金聖歎本『水滸伝』考」(『和漢語文研究』第 14 号、2016 年)

——『『水滸伝』本文の研究——文学的側面について』(『京都府立大学学術報告・人文』第 69 号、2017 年)

——『『水滸伝』石渠閣補刻本本文の研究』(『中国文学報』第 91 冊、2018 年)

・小松建男『『三国志演義』の生成』(『中国文化——研究と教育』第 59 号、2001 年)

・佐藤晴彦「元明期の文字表記——〈個〉の出現をめぐって」(『神戸外大論叢』第 51 卷 第 6 号、2000 年)

——「国家図書館蔵『水滸伝』残巻について——“嘉靖本”か？」(『日本中国学会報』第 57 集、2005 年)

・ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール 方法論の試み』(花輪光、和泉涼一訳、水声社、1985 年)

——『物語の詩学 続・物語のディスクール』(和泉涼一、青柳悦子訳、水声社、1985 年)

・ジェラルド・プリンス「物語論辞典」(遠藤健一訳、松柏社、1991 年)

・陣野英則『源氏物語の話声と表現世界』(勉誠出版、2004 年)

・菅原克也『小説のしくみ——近代文学の「語り」と物語分析』(東京大学出版会、2017 年)

・鈴木修次、高木正一、前野直彬編『中国文化叢書 五 文学史』(大修館書店、1968 年)

・鈴木陽一「『儒林外史』の文体について」(『中国語学』第 224 号、1977 年)

——『『西遊記』における人物形象の再検討(二)——猪八戒と孫悟空』(『言語文化研究』創刊号、1981 年)

——「中国小説研究のニューウェーブ」(『中国古典小説研究動態』創刊号、1987

年)

——「【書評】陳平原《中国小説叙事模式的転変》を評す」(『中国古典小説研究動態』第2号、1988年)

・仙石知子「旧中国の女性の名——排行による呼称と親族称谓語から」(『中国——社会と文化』第20号、2005年)

——『毛宗崗批評『三国志演義』の研究』(汲古書院、2017年、266頁)

・高島俊男『水滸伝の世界』(筑摩書房、2001年)

・田窪行則「対話における知識管理について——対話モデルからみた日本語の特性」(『アジアの諸言語と一般言語学』、1990年)

・竹内オサム『マンガ表現学入門』(筑摩書房、2005年)

・竹内真彦『『三国志演義』における関羽の呼称——『演義』成立をめぐって』(『日本中国学会報』第53集、2001年)

・竹下咲子「金聖歎批評の源流を探る——百二十回本『水滸伝』李卓吾批評を中心に」(『和漢語文研究』第7号、2009年)

・田中智行『『金瓶梅』の感情観——感情を動かすものへの認識とその表現』(『日本中国学会報』第57集、2005年)

——「『金瓶梅』の人物描写——第三十四回における西門慶像の「不統一」を中心に」(『東方学』第114輯、2007年)

——「『金瓶梅』張竹坡批評の態度——金聖歎の継承と展開」(『東方学』第125輯、2013年)

・張小鋼「金聖嘆文学批評の成立」(名古屋大学博士論文、1996年)

・塚本照和「紅樓夢における「詈詞」について」(『集刊東洋学』第16号、1966年)

・辻村敏樹『敬語論考』(明治書院、1992年)

・寺村政男「『水滸伝』から『金瓶梅詞話』への変化——罵語を中心として」(『中国総合研究』創刊号、1975年)

——「『金瓶梅詞話』における作者介入文——看官聴説考」(『中国文学研究』第2期、1976年)

・デイヴィッド・ロッジ『小説の技巧』(柴田元幸・斎藤兆史訳、白水社、1997年)

・滕小春「中国語数量詞とアルの対照研究」(『広島大学留学生教育』第19号、2015年)

・中川諭『『三国志演義』版本の研究』(汲古書院、1998年)

・中里見敬「話本小説における物語行為」(『文化』第56巻1・2号、1992年)

——『中国小説の物語論的研究』(汲古書院、1996年)

——「内面」を創出する——文体論的アプローチ」(『日本中国学会報』第 56 集、2004 年)

——「中国語の自由間接話法について」(『東アジア文化交渉研究』別冊第 7 号、2011 年)

・中野幸一「源氏物語における草子地」(『源氏物語講座』第 1 巻、1971 年)

・中村幸彦『近世小説史の研究』(桜楓社、1961 年)

・中鉢雅量『中国小説史研究——水滸伝を中心として』(汲古書院、1996 年)

・野崎駿平「元の雑劇にあらわれた「詈詞」について」(『中国語学』第 58 号、1957 年)

・橋本陽介『ナラトロジー入門——プロップからジュネットまでの物語論』(水声社、2014 年)

——『物語における時間と話法の比較詩学——日本語と中国語からのナラトロジー』(水声社、2014 年)

・葉山恭江『唐代伝記を語る語り手——物語の時間と空間』(汲古書院、2016 年)

・馬場昭佳「『水滸伝』の成立と受容——宋代忠義英雄譚を軸に」(東京大学博士論文、2013 年)

・廣澤裕介「全相平話」と絵解き芸能」(『日本中国学会報』第 69 集、2017 年)

・ピーター・バリー『文学理論講義——新しいスタンダード』(高橋和久監訳、ミネルヴァ書房、2014 年)

・フォルター・シュタンツェル著、前田彰一訳『物語の構造 〈語り〉の理論とテキスト分析』(岩波書店、岩波オンデマンドブックス、2014 年)

・藤井貞和『平安物語叙述論』(東京大学出版会、2001 年)

・藤井省三、大木康『新しい中国文学史 近世から現代まで』(ミネルヴァ書房、1997 年)

・豊後宏記「全相平話五種に見える「但見・只見」」(『学林』第 38 号、2003 年)

・李福清(ボリス・リフチン)「中国叙事文学における人物描写の変遷過程——歴史詩学の視点から」(『中国文学研究』第 27 期、2001 年)

・前田彰一『物語の方法論——言葉と語りの意味論的考察』(多賀出版、1996 年)

——『物語のナラトロジー——言語と文体の分析』(彩流社、2004 年)

・三谷邦明『物語文学の言説』(有精堂、1992 年)

・三谷邦明編『源氏物語の〈語り〉と〈言説〉』(有精堂、1994 年)

・宮崎市定『宮崎市定全集 一二 水滸伝』(岩波書店、1992 年)

・山崎直樹「テキストの継続性と固有名詞」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第 14 集、文学・芸術学編、1987 年)

——「物語における新規項目の導入と文型の選択」(『中国語学』第 242 号、1995

年)

- ・劉羈『談話空間における文脈指示』(京都大学学術出版会、2015年)
- ・渡部直己『日本小説批評の起源』(河出書房新社、2020年)
- ・渡辺博文「『紅樓夢』における罵倒語の類型と意味」(『人文研究』第156号、2005年)
- ・渡邊義浩『三国志 演義から正史、そして史実へ』(中央公論新社、2011年)

中国語文献

- ・陳果安『金聖歎小説理論研究』(湖南師範大学出版社、1999年)
- ・陳寧『通識中國古典小説』(中華書局(香港)有限公司、2008年)
- ・陳平原『中国小説叙事模式的轉變』(上海人民出版社、1988年)
- ・侯会『《水滸》源流新証』(華文出版社、2002年)
- ・黃強『八股文与明清文学論稿』(上海古籍出版社、2004年)
- ・李炳澤『咒与罵』(河北人民出版社、1997年)
- ・劉福根『漢語詈詞研究』(浙江人民出版社、2008年)
- ・劉海燕『明清《三国志演義》文本演變与評点研究』(福建人民出版社、2010年)
- ・魯德才『古代白話小説形態發展史論』(南開大学出版社、2002年)
- ・魯迅『魯迅全集』(人民文学出版社、2005年)
- ・沈伯俊「『三国志宗僚』考辯」(『文学遺產』1999年第5期、1999年)
- ・申丹『叙述学与小説文体学研究』(北京大学出版社、2001年)
- 「叙事学研究在中国与西方」(『外国文学研究』2005年第4期、2005年)
- ・王平『中国古代小説叙事研究』(河北人民出版社、2001年)
- ・王懿「論“只見”的功能演化」(『語言研究集刊』第15輯、2015年)
- ・王穎、黃強『遊戲八股文研究』(武漢大学出版社、2015年)
- ・文孟君『罵詈語』(新華出版社、1998年)
- ・吳礼權「『史記』史伝体篇章結構修辭模式对伝奇小説的影響」(『福建師範大学学報(哲学社会科学版)』第148期、2008年)
- ・吳正嵐『金聖歎評伝』(南京大学出版社、2006年)
- ・楊義『中国叙事学』(人民出版社、1997年、楊義文存第1卷)
- ・張勇『元明小説發展研究——以人物描写為中心』(復旦大学出版社、2007年)
- ・趙毅衡『苦惱的叙述者』(四川文芸出版社、2013年)
- ・鄭培凱「酒色財氣与《金瓶梅詞話》的開頭」(『中華文史論叢』第28輯、1983年)
- ・鄭振鐸『鄭振鐸全集』第4卷(花山文芸出版社、1998年)
- ・鐘錫南『金聖歎文学批評理論研究』(上海古籍出版社、2006年)

中国語辞典

- ・林紹徳編著『詩詞曲詞語雜釋』（四川人民出版社、1986年）
- ・劉法白、劉鏡芙編著『水滸語詞詞典』（上海辞書出版社、1989年）
- ・陸澹安編著『小説詞語匯釋』（上海古籍出版社、1964年）
- ・羅竹風主編『漢語大詞典』（上海辞書出版社、1986年）
- ・張相編著『詩詞曲語辞匯釋』（中華書局、1953年）

水滸伝原典資料

- ・『明容與堂刻水滸傳』（上海人民出版社、1975年）[容与堂本]
- ・京都大学文学研究科図書館蔵、平田昌司旧蔵本『忠義水滸伝』[石渠閣補刻本]
- ・東京大学文学部蔵、神山閨次旧蔵本『忠義水滸全傳』[百二十回本]
- ・早稲田大学図書館蔵『忠義水滸全書』[百二十回本(郁郁堂本)]
- ・『第五才子書施耐菴水滸傳』（古本小説集成、上海古籍出版社、1990年）[金聖歎本]

三国志演義原典資料

- ・『三国志通俗演義』（古本小説集成、上海古籍出版社、1992年）[嘉靖本]
- ・井上泰山編『三国志通俗演義史伝』（関西大学出版部、1997年～1998年）[葉逢春本]
- ・『三国志演義古版叢刊五種』所収『双峰堂本批評三国志伝』（中華全国図書館文献縮微複制中心、1994年）[余象斗本]
- ・『李卓吾先生批評三国志』（ゆまに書房、1984年）[李卓吾本]
- ・中国国家図書館蔵、醉耕堂刊『四大奇書第一種』[毛宗崗本]

その他原典資料

- ・『後漢書』（中華書局、1965年）
- ・『三国志』（中華書局、1971年）
- ・『癸辛雜識 前後續初集』（叢書集成初編、中華書局、1991年）
- ・『三国志平話』（古本小説集成、上海古籍出版社、1990年）
- ・『清平山堂話本』（古本小説集成、上海古籍出版社、1990年）
- ・『南村輟耕録』（中華書局、1959年）
- ・『新刻金瓶梅詞話』（古佚小説刊行会、1933年）
- ・『二十七松堂文集』（屠友祥校注、上海遠東出版社、1999年）
- ・『黄人：評伝・作品選』（湯哲声、涂小馬編著、清末民初文人叢書、中国文史出版社、1908年）

初出一覧

- 第一章 「『水滸伝』の語りをめぐる考察——人物描写を中心に」
(『東方学』第126輯、2013年)
- 第二章 「『水滸伝』の人物呼称に見える待遇表現」
(『日本中国学会報』第68集、2016年)
- 第三章 「金聖歎本『水滸伝』の批評に見える「眼中」について」
(『慶應義塾中国文学会報』第4号、2020年)
- 第四章 「毛宗崗本『三国志演義』の「視点」をめぐる改変」
(『東方学』第136輯、2018年)
- 第五章 「『三国志演義』作中人物導入考——『平話』から「毛宗崗本」まで」
(『中国古典小説研究』第22号、2018年)

論文の内容の要旨

論文題目 明清白話小説の「語り」
——『三国志演義』『水滸伝』を例に

氏 名 佐高 春音

本論文は、『三国志演義』『水滸伝』を例にとり、テキスト分析を通して、明清時代に刊行された長編白話小説の物語の語り方を明らかにすることを目的とするものである。中でも、作品の言説を地の文とセリフに大別した上で、地の文の多様なあり方に着目し、地の文の中で作中人物の情報がどのように読者に伝達されるかという問題に焦点を当てる。

序論では、本論文がテキスト分析の方法として参考とする物語論(ナラトロジー)の概要を述べるとともに、物語論的アプローチをとる日本及び中国の先行研究を整理し、続いて分析対象である『三国志演義』『水滸伝』の成立と展開について概説した。中国における中国古典文学研究では、西洋の物語論が積極的に利用される一方、個別の理論を直接的に当てはめすぎるという問題点が存在する。反対に、日本における中国古典文学研究では、物語論的アプローチの採用に対して懐疑的、消極的な傾向が強い。本論を通して、両作品における地の文の多様なあり方に迫りつつ、「語り」の分析が『三国志演義』『水滸伝』のような個人創作とは異なる世代累積型の作品に対しても有効性を発揮し得るのかという問題を検証していく。

第一章では、容与堂本『水滸伝』を対象に、「作中人物の性格・性質に言及する地の文」に注目して分析を行った。これらの地の文は作品全体に用いられているわけではなく、分布に偏りが存在する。その大半は、閻婆惜・潘金蓮・潘巧雲などの女性人物が登場する男女のエピソードに集中しており、「何某は××

な人である」という断定的な説明によって人物の性格・性質が強調されている。明代には「酒色財氣（飲酒・好色・財欲・短気）」が人の忌避すべきものとして考えられていたが、『水滸伝』に見える「作中人物の性格・性質に言及する地の文」は「色」に関わる部分に集中しており、それに加えて「色」に付随する「酒」「財」及び一部の「氣」に関わる部分にも用いられていることがわかった。それぞれが異なる来歴を持つと思われるエピソードに、このような同一或いは類似の叙述形式が現れる背景には、一編の長編白話小説として『水滸伝』を集大成した「編纂者」の筆致が関わっている可能性が考えられる。

第二章では、容与堂本『水滸伝』の地の文に見える、マイナスの価値判断や認識を帯びた呼称表現を切り口として分析を行った。通常『水滸伝』の地の文が人物を指示する際には、名前やあだ名、職業身分名などの比較的ニュートラルな呼称が用いられるが、少数例として、「這廝」「那廝」「賊秃」「賊臣」などの、人を罵ったり貶めたりするマイナスの呼称が用いられることがある。その指示対象には偏りがあり、蔡京・童貫・高俅・楊戩ら四人の奸臣、梁山泊勢と敵対する方臘勢のほか、閻婆惜と張文遠、潘金蓮と西門慶、潘巧雲と裴如海、賈氏と李固など、色事に関連する男女のエピソードに集中している。地の文におけるマイナスの呼称は、主人公側に感情移入する読者の共感を煽り、より一層読者を物語世界に引き込むとともに、悪玉人物の悪玉としての位置づけを強調し、作品が設定する価値観を正しく読者に伝達するという二つの機能を果たしていると考えられる。第一章で論じた「作中人物の性格・性質に言及する地の文」と同様に、地の文に見えるマイナスの呼称にも、『水滸伝』を集大成した「編纂者」の筆致が関わっている可能性が高い。なお、百二十回本は容与堂本とほぼ同じ結果を示すが、百二十回本をベースとする金聖歎本では、石秀の「眼中」から潘巧雲と裴如海を語る際に、石秀の見るに堪えないというマイナスの認識や感情を反映するという目的のもと、両者の地の文における呼称を途中から「淫婦」「賊秃」に統一するよう書き換えており、マイナスの呼称が作中人物の認識や感情を反映する要素として活用されている。

第三章では、金聖歎本『水滸伝』の評語に散見する、作中人物の「眼中」に関わる批評に着目して分析を行った。「眼中」のターム自体は百二十回本李卓吾評でも数例見られるが、金聖歎本ではその使用数と言及数が格段に増加している。調査の結果、金聖歎は「作中人物＋知覚動詞」「只見」に続く文を、作中人物の「眼中」を示すものとみなしていることがわかった。白話小説中に用いられる「作中人物＋視覚動詞」「只見」は、必ずしも「作中人物が見る」ことに直結するものではなく、語りを進めるための仕組みとして機能しているが、金聖歎はこれらの表現を作中人物の「眼中」と結び付け、作中人物の「眼中」から

描く際のマーカーとして捉えている。また、「眼中」に関わる本文の書き換えも行われており、第二章でも取りあげた「淫婦」「賊禿」の例や、李逵の「眼中」のことであるという理由から、李逵が知らないはずの「玉枢宝経」「雲床」を「什麼經號（何かのお経）」「日間這件東西（昼間のあれ）」に書き換えている例などについて論じた。評語と書き換えの分析により、金聖歎が想定する作中人物の「眼中」は、単なる眼の中にとどまらず、作中人物の心の中や頭の中、すなわち作中人物の内面世界まで包括する概念として用いられており、金聖歎が物語論の「視点」に近似する概念を有していることが明確になった。

第四章では、毛宗崗本『三国志演義』を対象として、再び「視点」に関わる問題に切り込んだ。嘉靖本、李卓吾本などの毛宗崗本より前に編まれた版本では、視覚動詞を用いて「作中人物が見る」ことが示唆された後、その人物が見ても知覚・認識できないはずの情報が続けて示されることがある。このような現象は、視覚動詞を用いて「作中人物が見る」ことを示唆する記述が、多くの場合、場面に新たな作中人物を導入し、語りを進めるための仕組みとして機能しており、必ずしも作中人物の視点を反映することを意図したものではなかったことに起因していると考えられる。しかし、毛宗崗本に至ると当該箇所は大幅に書き換えられ、前述の、「見る」ことが示唆された後、その作中人物が知覚・認識できないはずの情報が続けて示されるという現象は解消する。また、毛宗崗本の本文に附された批評には、しばしば作中人物の「眼中」から描くことの意義と効果について明言されており、その書き換えが意図的なものであったことは明らかである。以上のことから、毛宗崗本には「視点」の概念に近似した、文章表現そのものに対する極めて高い意識が存在し、その意識が毛宗崗本における改変に大きく関わっているという結論を得た。毛宗崗本の批評のスタイルは金聖歎本『水滸伝』を踏襲しており、「視点」に関わる文章観という点でも、金聖歎の影響を受けていることが明らかとなった。

第五章では、作中人物がどのようにその存在を指示され、どのようにその情報を紹介されるのかという作中人物導入・紹介の方法に注目し、長大な歴史を持つ三国志物語の叙式的変遷を明らかにした。分析対象としたのは、歴史書『三国志』、『三国志平話』、『三国志演義』の諸版本である。歴史書『三国志』や三国志物語に関するエピソードを載せる逸話集では、初めから固有名詞を用いて初出の人物を指示するのが常であったが、『三国志平話』では、「一人……（ある一人の人が……）」といったように、初出の人物を不定の存在として指示した後でその情報を明かす方法が混在するようになり、『三国志演義』では、初出の人物を不定の人物として指示した後で、姓・名・字・出身地などのプロフィール情報を明かし、固有名による指示に移行する方法に統一されるという、導入

方法の転換が生じている。このほか、毛宗崗本以前の版本では、既に姓・名・字・出身地などのプロフィール情報を開示している人物に対して、地の文の中で再度同様の情報を列記するケースが見られるが、毛宗崗本はそれらの重複を徹底的に回避するよう書き換えを行っており、毛宗崗の微細にわたる改変方針の一面が浮き彫りとなった。

終章では、各章を通して得られた新知見を振り返りつつ、言説を区分し、地の文のあり方に着目して「語り」の分析を行うアプローチ方法が、『三国志演義』『水滸伝』のような世代累積型の作品に対しても有効に作用し得ることを再確認した。両作品が一編の長編白話小説として集大成された際の「編纂者」による編集や執筆の痕跡は、何らかの法則性をもってテキストに残されていると考えられ、作品に存在する「語り」の法則的な偏りを分析することは、作品の成立問題を探るための切り口になり得る。また、金聖歎本『水滸伝』と毛宗崗本『三国志演義』については、思想面においても表現面においても、それ以前に編まれた版本をはるかに上回る統一がなされていること、版本間の比較対照作業を通して、書き換え部分や新たな執筆部分を判断可能であることから、「語り」の分析はより一層有効である。

終章の末尾では、白話小説の「語り」の諸相をよりきめ細やかに表すことができるよう、「語り手の顕在化(人格化)」の度合い並びに「語り手と作中人物の同化」の度合いという二つのモデル図を示した。